

## 中学生の部 最優秀賞

## 幸福の条件

筑波大学附属中学校 3年 鈴木 理乃

## 作品名『こころ』

選んだ一行 私たちは最も幸福に生まれた人間の1対であるべきです。

「私たちは最も幸福に生まれた人間の1対であるべきはずですが、これは先生が「私」に自分と妻について語った一文だ。私はこの一文に先生と妻の関係がよく表わされていると思った。先生はなぜ「幸福だ」という断定的な言い方ではなく「幸福であるべきはずだ」と言ったのだろうか。先生は幸福ではないと感じていたのだろうか。

私は家族の幸福の証は「愛」なのだろうと思っていた。そして先生と妻はお互い愛し合っているのだから幸福なのだろうと推測していたのだ。しかし私は読み進めるうちに幸福な家族になるには「お互いの信頼」が必要不可欠であると気づいた。例えば、仲のよさそうだった夫婦がどちらかの不倫が原因で破局するという話はよく聞くが、これも夫婦間での信頼が失われたからだと思う。

見せかけの愛ではなく、お互いの信頼こそが幸せを生むのだ。そして先生と妻にはその信頼がなかったのではないだろうか。その原因は先生が持つ深い過去だ。先生は妻を自分のものにするため、自分の親友を裏切り、その行為が親友を自殺に追い込んだ。その深く暗い過去が先生に罪悪感という暗い影を落としていたのだ。先生は、妻にその過去を悟られるのではないか怯えながら、妻はその違和感に気づき何故夫は教えてくれないのか不安にかられながら、知らないうちにお互いを探り合っていたのだ。つまりその過去の秘密が二人の間の信頼を妨げる壁になっていたのだ。しかし先生はその過去を死んでも妻に明かさなかった。先生は遺書で、こう述べている。「妻が己の過去に對して持つ記憶をなるべく純白のまま保存しておくのが私の唯一の望みなのです」と。先生は自分が最も尊いと思う妻のこころを自分の醜い過去で壊してしまうことを恐れて言わなかったのだ。また最も愛すべき妻には、自分が感じたような罪悪感を抱え生きる苦しみを味わってほしくなかったのだと思う。

そう考えると先生の辛さがよくわかる。愛する妻が先生に愛以上のものを求めている、自分もそれを心の底から望んでいる。しかし妻に求められれば求められるほど自らの暗い過去と切り離せなくなり、妻の気持ちにこたえることが出来ない。どちらにせよ妻を傷つけてしまう。これほどまでに虚しく悲しい矛盾があるのだと私は初めて知った。

先生のこころはまるで、温かい血の流れを何層にも重ねられた冷たい氷が覆っているようだ。どんなにその血が温かくても氷の層が冷やしてしまう。その分厚く冷たい氷が先生の生の動きを押さえつけるのだ。

私はまだ「愛」の奥にある「信頼」を知らない。(たぶん愛さえもまだわかっていないのだと思う。)愛は信頼のための単なるプロセスに過ぎないのかもしれない。将来大人になったらその答えが分かる時が来ると思う。そうしたらまたこの本を読み返してみたい。その時どのように感じるかとても楽しみだ。